

侵入する外来植物の現況

外来生物の侵入は生物多様性を脅かす主要な要因の1つとして認識されている。日本においても、2004年に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が公布され、生態系等に係わる被害を及ぼすあるいは及ぼす可能性がある外来生物を特定外来生物として指定し、防除などの措置を講ずることが定められている。

■ヒメジョオンの侵入状況

ヒメジョオンは、北アメリカ原産で明治初期に渡来し帰化。北海道～九州に広く分布している。秋に種子から芽生えてロゼットを形成し、そのまま越冬して翌年の初夏から夏に花茎を伸ばし、秋に種子を散布して繁殖する。特徴は、草丈が高く、丈の低い植物よりも生殖の効率が高くなる。また、土壌の種類を選ばず、土壌環境に対する適応性が大きく、低地から高山地帯にまで生育する。1個体の種子生産量は5万個近くに及び種子の寿命が35年に及ぶとの報告があり、土壌シードバンクを形成する。

環境省は、侵略的外来種ワースト100に指定している。日本生態学会は、さらに生物多様性を脅かす特定外来植物を選定し、対策緊急度の最も高いAランク(16種)の一つとしてリストアップしている。



伊吹山ドライブウェイ沿道に侵入したヒメジョオンは、路傍に延々と繁茂し、8合目駐車場周辺のあちこちの空き地に群生を形成している。

2004年、西コースの斜面に群生を見せたヒメジョオンは、4年後の2008年にも同じ場所で同じように繁茂し、周辺の植生環境に大きな影響をもたらしている。▼ ▶



▲ 西コース谷斜面周辺は、2000～2005年にかけて5回、アカソ群落の刈り払いと株の掘り起こしが実施された場所である。



▲ 西コース谷斜面 (アカソ群落掘り起こし跡)

▲ 西コース雪崩防止柵周辺

▲ 東コースにも侵入している (ススキ群落刈取跡)

■セイヨウタンポポの侵入状況

ヨーロッパが原産の帰化植物で、日本の在来種とは外側の苞片の反る点が異なる。性質としては、3倍体で、単為生殖で種子をつける。つまり、花粉に関係なく、種子が単独で熟してしまう。そのため繁殖力が強く、都市部を中心として日本各地に広まり、特に近年の攪乱が多い地域を中心に分布を広げた。現在は、ヒメジョオン同様に侵略的外来種ワースト100に指定され、対策緊急度の最も高いAランク（16種）の一つである。

近年、外来種と在来種の交雑による雑種性タンポポが報告されたことから、タンポポの形態や生態に関する知見の再検討が必要となった。遺伝マーカーを用いた解析から、雑種性タンポポは3タイプに大別され、それぞれに特徴的な頭花の形態や分布域をもつことが示された。在来種の保全という観点からは、雑種性タンポポと在来種タンポポの交雑や後退の動態に注目する必要がある。以上、(日本生物科学協会編集「生物科学」●芝池博幸：無融合生殖種と有性生殖種の出会い—日本に侵入したセイヨウタンポポの場合から抜粋)

伊吹山頂部へは、2000年頃に侵入したと思われる、現在、本会の調査(2008.6)では山頂山小屋周辺部のセイヨウタンポポの被度は94%近くになっている。山頂周辺には、在来種のセイタカタンポポと固有種のイブキタンポポがわずか6%の割合で生育するが、交雑により種の保存が懸念される。



裸地に侵入するが、生い茂った草地には侵入しない特性がある。

山頂トイレ周辺 2008.05.27

▲ 山頂部のセイヨウタンポポは、2007・08年の2回除去されたが、残留した根茎から株立ちし、株数が増加している。



山頂山小屋南斜面 2007.06.02

▲ 人が休憩する場所は、すべてセイヨウタンポポで覆われている。



登山道4~3合目周辺 2008.05.03

<外来種の除去>

セイヨウタンポポやフランスギク等の外来植物の除去にあっては、最も進んだ科学知識に基づき、適確な方法で行わなければならない。

また、みんなで一緒に抜こう(プリング・トゥギャザー)というイベント色の濃い除去作業もよいが、一日のみの作業でなく、持続性あるフォローが伴わなければ、逆効果となる。



2008.05.18

▲ 三合目の登山道周辺の在来種タンポポの被度は、本会の調査(2008.5)では、62~3%。四合目から八合目にいたっては、94%以上あり、今のところ外来種の侵入は少ない。ただし、数十株の生育は確認されているため、早急な措置を講じる必要がある。

◀ 山頂に生育していたイブキタンポポ(固有種)山頂での在来種の被度は、わずか6%未満。